



TITLE:

<VI>コミュニティ・ネットワーク 形成支援

AUTHOR(S):

松下, 佳代

CITATION:

松下, 佳代. <VI>コミュニティ・ネットワーク形成支援. CPEHE Annual Report 2019, 2018: 42-43

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/241571>

RIGHT:



Ⅵ. コミュニティ・ネットワーク形成支援

大学教育に関する改革や改善においては、国内外の新しい施策や学術的な動向、それに伴う他の大学や学部の実践的な取り組みについて情報収集する必要があります。その上で、必要な事項を、京都大学全体や各部局の教育改革・改善の取り組みに反映させなければなりません。

本センターでは、このような情報収集を行い、そこからコミュニティ・ネットワーク形成を図るべく、「あさがおメーリングリスト」「大学教育研究フォーラム」の2つのシステムを構築しています。

1. あさがおメーリングリスト <http://kyoto-u.s-coop.net/asagao/>

本センターが、2003年より16年にわたって提供しているサービスです。

- メーリングリストアーカイブ(検索機能付き)
- メール投稿フォーム
- ユーザー登録・登録解除フォーム
- メールアドレス変更フォーム

以上の4つの機能からなり、本センターや京都大学からの高等教育に関する案内が全国の関係者に配信されます。登録ユーザーからも、高等教育に関する各種イベント等の案内が配信されるので、全国の主だったイベントについての情報や今どのような施策や取り組みに全国の関心が向けられているかという動向を、このメーリングリストを通して把握することができます。

2019年1月現在で、ユーザー登録数は5,395名(2015年3,429名、2016年4,192名、2017年4,836名)、投稿・配信数は1,270件(2015年621件、2016年944件、2017年975件)で、ともに年々増加傾向にあります。全国の大学教育改革・改善に関わる多くの関係者は、あさがおメーリングリストに登録しています。

2. 大学教育研究フォーラム

(1) 大学教育研究フォーラムとは

本センターが1994年の設立以来開催してきた、大学教育改革や改善に関する施策や実践が報告される国内最大級のフォーラムです。2018年度で第25回を迎えます。

大学教育研究フォーラムは、①特別講演、②シンポジウム、③学術セミナー、④個人研究発表(口頭発表・ポスター発表)、⑤参加者企画セッション、を基本プログラムとしており、年によって小さな追加・変更を行っています。

(2) 第24回大学教育研究フォーラム(2018年3月20-21日)の開催

2019年1月現在、2018年度のフォーラムはまだ開催されていませんので、ここでは2017年度の実績をご報告します。2017年度は、以下のプログラムで開催し(敬称略)、計755名の方が参加しました。

①特別講演

竹内 洋(関西大学東京センター長・京都大学名誉教授・関西大学名誉教授)

「アメリカを『鏡』に日本の大学を考える」

②シンポジウム「人工知能に代替されない能力とその教育を考える」

報告者1 松原 仁(公立はこだて未来大学副理事長兼教授) 「人間と人工知能の共存に向けて」

報告者2 河野 哲也(立教大学文学部教授) 「対話と思考と身体性—AI社会を生きる力—」

指定討論: 北野 正雄(京都大学理事・副学長)

③MOSTフェロー発表会「MEGA CRISIS 巨大危機 IN CLASSROOM～脅威と闘う教員たち～」

本センターでは、特徴ある授業実践を行っている全国の大学教員が参加するMOSTフェローシッププログラムを、2012年より実施してきました。MOSTフェローは、対面やオンラインで交流しながら、1年間かけてそれぞれの授業改善に取り組み、授業実践の中で直面する様々な教育的課題を相互の実践知から解決する大学教員の情報共有コミュニティを目指して活動しています。

MOSTフェローコミュニティでは、グッドプラクティスだけではなく、失敗事例や未解決の難題も共有されます。本発表では、授業や教育実践の中で実際に起こった「クライシス」を題材に、様々な困難をどうやって乗り越えていけばよいのかを考えました。

④学術セミナー

講師1：緒方 広明(京都大学学術情報メディアセンター教授)

「教育・学習データの利活用によるエビデンスベースの大学教育の未来像—ラーニングアナリティクスの研究実践を通じて—」

講師2：杉原 保史(京都大学学生総合支援センター長)

「学生の悩み相談の現場から—近年の傾向と課題—」

⑤参加者企画セッション(計14件) ※2015年度は11件、2016年度は14件

ある特定のテーマでの研究・実践交流を促す目的で、一般参加者から募集するセッションとなっています。2017年度は「学修成果の多角的・継続的な可視化とその活用—育成と一体化した評価の試み—」「3年間の調査から見てきたアクティブラーニング型授業の学習効果」「日本における大学版『知の理論』の可能性」など。

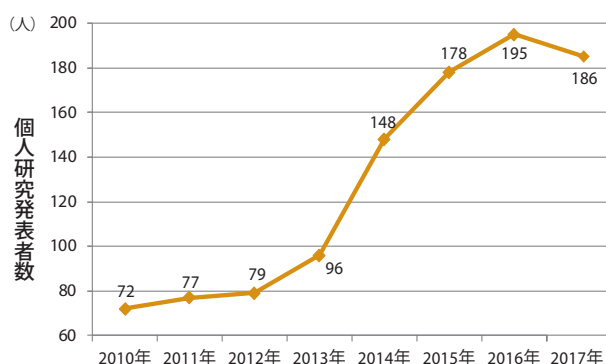
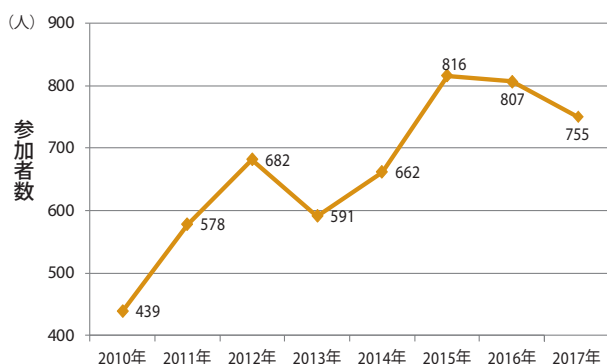
⑥個人研究発表(口頭発表106件・ポスター発表80件、計186件) ※2015年度は174件、2016年度は195件

(3) 成果と課題

2010年度以来、フォーラムの個人研究発表者数はほぼ増加傾向にありましたが、2017年度は初めて前年度を下回りました。一方、参加者数は、ここ3年やや減少傾向にあります。一因として2016年度からの参加費の徴収が考えられますが、同じ年に発表費の徴収も始めたにもかかわらず発表者数はさほど減少していないことを考えると、より熱心な参加者にまわってきたということかもしれません。

主催者としては、毎年、事後アンケート結果にもとづき、プログラムや運営方法の改善を重ねてきていますが、さらに魅力的なフォーラムにしていきたいと思えます。

●大学教育研究フォーラム：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/>



参加者数・個人研究発表者数の推移(2010-2017年度)

(松下 佳代)